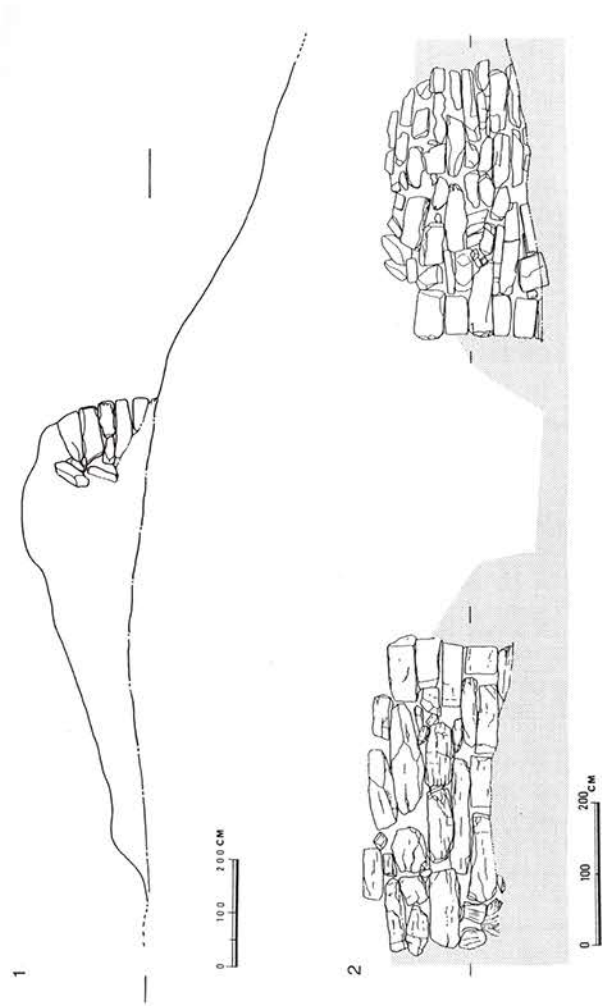


図1. 城山における土・石塁および石造加工物等の配置図
 (図は国土地理院発行2万5千分の1地形図をもとに作成)



・石塁・土塁

城山を二重に廻るもので、ほとんどは土塁だが、城門など一部で石塁となる。高さは1.8m程度で、塁上面が幅5～6mで平坦になっている。400m水準と300m水準に設置されており、所々消失しているが、南東部において特に疎である。

・城門・・・1

上部3.6m、基底部7mの石塁が4.4mの間隔を空け途切れており、コーナー部では切石を算木積みになっている。高さは上部の土盛も含め2.8m。石塁は両側に9m程連続している。

・水口・・・2

谷部を渡る石塁に作られた高さ0.5m、幅0.4mの排水口。付近の石塁は現在高さ1.5m程度だが上部に土盛りはなく、かつては3m程あったといわれる。

・ホロソ石・・・3, 4, 8, 9, 11, 13, 15, 16, 18

長さ1.5m、幅0.9m、高さ0.5m程の石材の長辺中央に幅0.6m、奥行0.3mほどの抉りを入れ、凹形に加工した石。18番のものは抉りが貫通せず、上面を浅く削るに留まっている。

・マナイタ石・・・6, 19, 21 (20)

長さ2m、幅1.2m、高さ0.5m程の石材の中央に、長辺と平行に8cm程の段差を設けている。6番と21番は原位置からの移動が知られている。(21番は大正7年20番の位置から降ろされてきた)

・カガミ石・・・10, 14, 17

ホロソ石と同規模の加工石だが、抉りを入れられていない。いずれもホロソ石の近辺にある。

・積石遺構・・・5

長さ10m、幅5m、高さ0.5mの方形の石積み内に、平坦に敷石をしている。付近には平石を四方に立てた遺構もある。

・楼望の礎石・・・7

城山頂上部にある礎石群。原位置を保つものではないとされる。

・明神原の巨石群・・・12

かつて城山神社があったとされる明神原に散在する巨石群。仁和4年(888年)には国司菅原道真が雨乞いを執り行った。



写真1. 城門



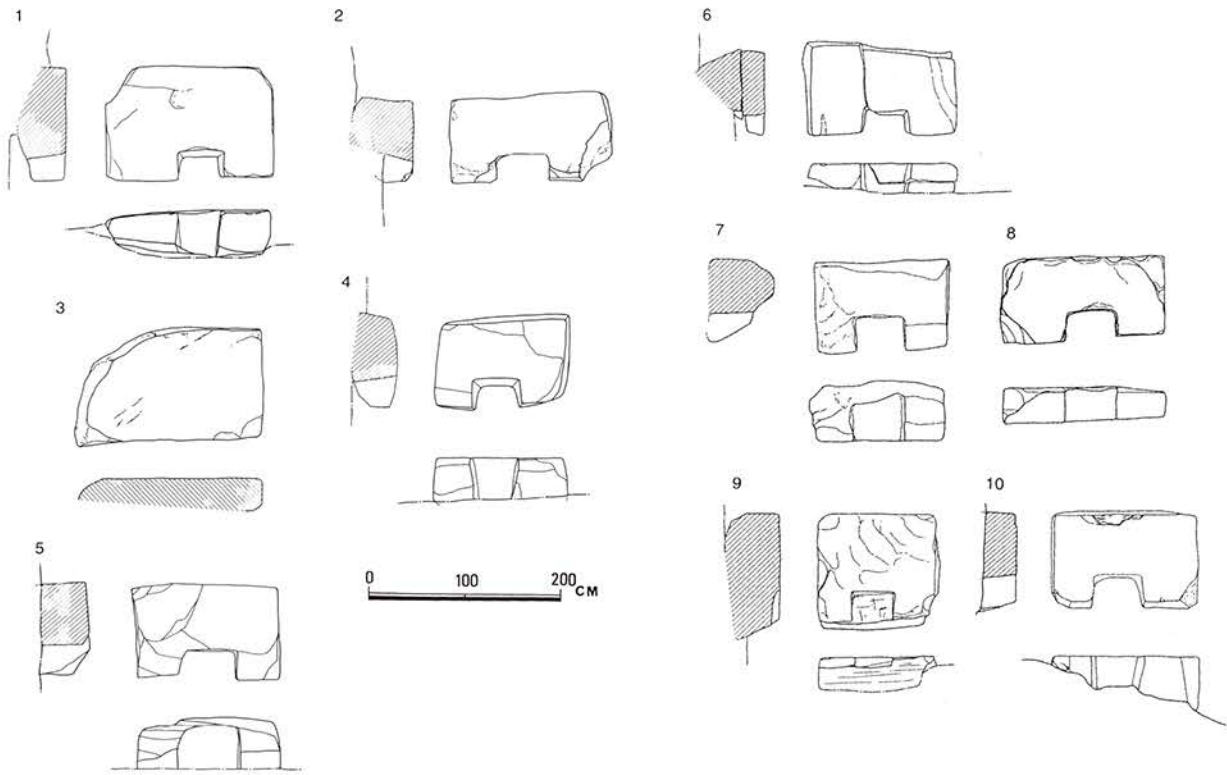
写真2. ホロソ石(13番)



写真3. マナイタ石(21番)

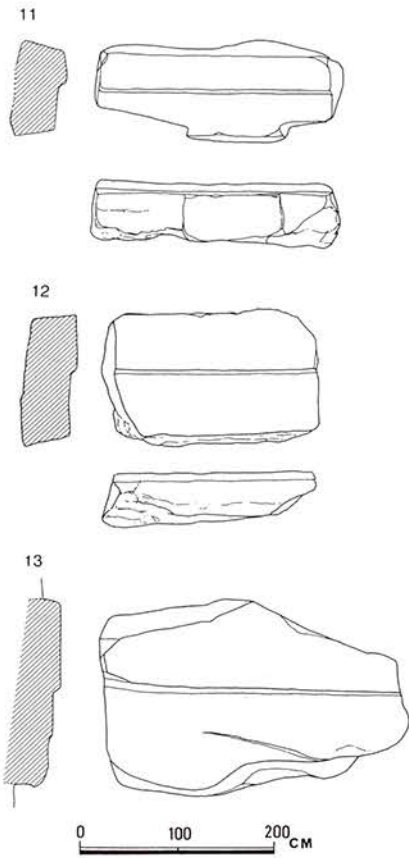


写真4. 明神原

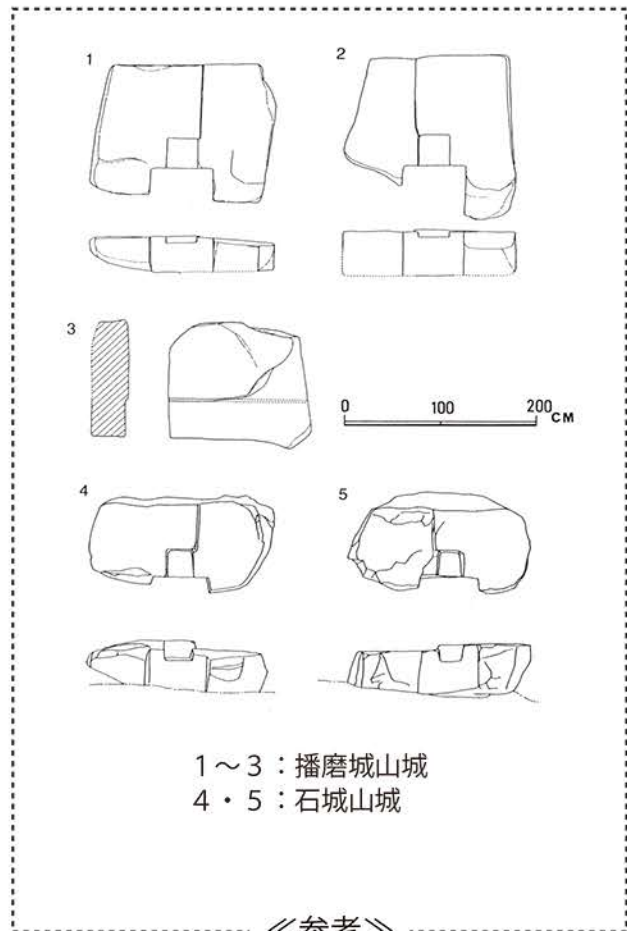


1：ササキ原西 2：ササキ原東 3：ササキ原
4：一本松東南方東 5：一本松東南方西

6：一本松西南 7：曾根越北 8：曾根越南
9：サルブチ滝 10：城門東方下



11：八十場白峰神社 12：坂本バエ
13：新城山



1～3：播磨城山城
4・5：石城山城

《参考》

ホロソ石, マナイタ石および凹型唐居敷

城山に 関係する 坂出の 民話

・悪魚退治

景行天皇の頃、香川県沿岸部（大槌島と小槌島の間）に悪魚^{※1}が出没し、大変領民を困らせていていたため、天皇はヤマトタケル（日本武尊）の息子タケカイコオウ（武彀王^{※2}）を遣わし^{※3}退治させることにした。

王は88人^{※4}の軍勢を率い、船に乗り込み悪魚と対峙したが、船もろとも飲み込まれてしまう。だが王はじめ兵士たちが悪魚の腹の中で火を焚き、武器を振り回したため、悪魚も遂に堪えかね皆を吐き出し息絶えた。このとき悪魚の腹部が流れ着いた所を福江（ふくえ）、尻尾が流れ着いた所を江尻（えじり）と呼ぶようになった。

しかし王を含め兵士たちはみな悪魚の毒にあてられ気絶していた。その時どこからともなく児童がやって来て、持参してきた水を与えられると、みるみる回復していった。この児童は横潮明神の使いで、水を汲んできた泉は八十場^{※5}の霊泉と呼ばれた。

王はそのまま讃岐国に留まり、サルレオウ（讃留霊王）と呼ばれ讃岐の地を統治した。^{※6}

のちにこの悪魚の祟りが付近の住民を悩ます事態が起きるが、ちょうど説法に訪れていた行基により、魚御堂（うおのみどう）という社を建て、中に悪魚の骨でつくった薬師如来を安置するという供養が行われたため、事件は沈静化する。

※1 ” えい” または” 江の魚（えのうお）” などの呼称がある。

※2 武卯王、武鼓王、武貝児王、武養蠶王とも

※3 ヤマトタケル自身としたり（その場合讃岐に留まるのは息子）、景行天皇の子カングシオウ（神櫛王）ともされる。成務天皇皇子とするものもあり。

※4 80人または800人とも

※5 八十八、弥蘇場、八百蘇場（やおそば）とも

※6 「書紀」には時期は違うが神櫛王、武彀王ともに讃岐に遣わされ、国造と綾氏の祖であるとの記事がある。

・城山長者

昔城山には大変な富豪がすんでおり、城山長者^{※1}と呼ばれていた。

長者には娘（乙姫）がいた。たいへんな美人であったが、足が不自由であった。そのため長者は城山に車が通行できるような道を作らせ、そこを通り娘ともに城山からの眺望を楽しんでいた。それが車道（くるまみち）である。それからというもの、車道には娘を一目見ようとする人々が大勢集まってきたという。

また同じ頃、金山にも金山長者という富豪がいた。金山長者は自身の財力を見せつけるため、城山長者に宝くらべを持ちかけた。金山長者は豪華にしつらえた車に、金銀財宝の数々を積み勝負に挑んだが、城山長者は自分の一番の宝として娘を連れてきた。

人々は「どうせ自分のものにならないのなら」と娘を支持し、敗れた金山長者は悔しさから、自身の金銀財宝を海に捨ててしまった。^{※2}

娘も年頃になりいつそう美しくなったため、長者は婿探しをすることにした。毎日明神原で祈っていたところ、ある晩夢の中に白髭の老人が現れ「阿波の国^{※3}に炭焼きをしている、とても心優しく働き者の若者がいる。この者を婿にするといい。」と勧められたため、長者は阿波国を探し回り、友造というお告げどおりの好青年を見つけ、長者の懇願により友造も婚姻を承諾する。

しかし幸せは長く続かず、娘は病にかかり死んでしまう。長者と友造は城山の麓に墓を建て^{※4}供養を続けていたが、生き甲斐を失った友造は大坂に出て働くことを決意し、長者に許される。そののち友造は富豪となり、炭焼きをしていたことから「すみとも」と名乗り、すみともの長者と呼ばれるようになる。

一方長者は娘と婿を失った悲しさからか好ましくない行動が目立つようになり、ある時山麓^{※5}のそば畑の中に馬で乱入した。人々は農作物を踏み荒らす長者をもう長くないと見ていたが、2、3年後に本当に死んだ。

その後すみとも長者に娘の墓守を頼まれた六部というものが、墓の近くに六地藏を祀り供養を続けていた。六部の死後、六地藏は娘の墓の隣に移されたが、屋根がないため祟りがおきたので、村人により屋根が作られ祭りが行われた。

※1 長者の正体としては、真玉、益甲（ますかば）、黒丸（くろまる）などが挙げられているが、いずれも武彀王の子孫であり、綾氏の祖であることには一致をみる。

※2 現在では金山は海に面していない。またこの事例を別の民話（金山の鯛）に付会させる例も見られる。

※3 現在の徳島県。香川とは讃岐山脈で隔てられる。

※4 川津町折居、郷師山麓に乙姫の墓と伝えられるものがある。

※5 城山城内にそば畑があったとするものもあり。